

選ばれる芸術観——上海・金山農民画の事例から見るローカル芸術の変容

雷 婷 (テイ)

(東京大学 総合文化研究科・地域文化研究専攻 博士課程)

「グローバル化」という現象は、個々の「ローカル」地域で、経済・文化・技術などの多様な領域に、そして観光開発、市場経済、交通手段の発達などの複合作用によって、異なる形で起こってきている。もちろん多くのローカル芸術もグローバル化を免れない。ローカル芸術を取り上げる人類学の議論は、「近代化」から起点した「西洋—非西洋」のカテゴリーに長く拘束されているが、「グローバル化」という現象に随伴して新しい様相を呈してくると考えられる。

「西洋—非西洋」の二項対立と一見して似通っているが、「グローバル」と「ローカル」はあくまでもディスコース概念として対立しているだけで、現実にはこのような二分法は成立しない。つまり、「グローバルな」というのは均質な基準でもなければ、「グローバル化」は世界の均質化でもないと考えられる。むしろ、人、モノ、資本、情報などの越境を意味する「グローバル化」の根底には、さまざまな価値基準が一つの地域に混在する状態がある。そこに生じる権力関係は不均衡であろうが、「ローカル」が一方的に抑えられるような暴力的な構図ではない。ローカル芸術においても、担い手の多くは、複数の芸術観＝価値基準から選択しながら、芸術を再表象・再構築している。

本発表は、中国上海市金山区の中洪村を中心地域として実践されているローカル芸術「金山農民画」を対象とする。この芸術の担い手は主に当地域に居住する農民が形成する、「金山農民画家」と呼ばれる集団である。その典型的な様式として、主に以下の2点があげられる：①1980年代以前の金山農村の日常生活を題材とすること、②刺繍や切り絵など、ローカル生活になじむ工芸品を想起させる要素を活かす表現手法を用いること。しかし、2000年代以降、当地域の観光化にともない、金山農民画はグローバル化の動きに取り巻かれ、多くの外部アクターと関与するようになり、その作品は土産物化・非物質文化遺産化されてきた。こうしたなかで、作品にも、画家の言動にも、大きな変容がみられる。

本発表は、金山農民画家の制作・販売などの行為、およびそれらにまつわる言説から、以下の3つの現象を取り上げたい：①既存する金山農民画の作品から技法、構図、モチーフなどを「模倣」して制作するという手法が画家集団に流布しているが、「私の作品は完全な独創だ」と、画家たちは口をそろえて模倣行為を否定する、②「模倣」と並行して、画家は新しい技法の開発にも没頭している、③画家は、「地域性」を金山農民画のアイデンティティとして強調する一方、顧客の希望に応じて、「無地域性」の作品（たとえば都市部の高層ビルや日本人学校などを題材とする作品）も積極的に作る。

そのような変容と矛盾は、単なる「グローバル」と「ローカル」の齟齬から生じるものではなく、画家たちが便宜上、さまざまな価値基準から取捨選択した結果である。本発表はその点を明らかにしたい。そして、「グローバル化」という文脈のなかで、制度や価値観における平板な対立を離れて「ローカル芸術」を再考するのに資したい。